なお主に望みをおいて

しかし、わたしは主を仰ぎ見、わが救の神を待つ。わが神はわたしの願いを聞かれる。（7）

ミカはエルサレムの現状を嘆きます。正直者はいなくなり、人はみな他人を騙そうと計ります。隣人も友人も、家族の者たちまで信用できないような社会になっていたのです。

このような絶望的な現実を前にしても、ミカは望みを失うことはありませんでした。主に目を注いだのです。「しかし、わたしは主を仰ぎ見、わが救の神を待つ。わが神はわたしの願いを聞かれる」。誰一人として信用できる存在が地上にはいなくなったとしても、主なる神だけは決して変わることのないお方であることを知っていたのです。ミカは本書の最後にこのように語ります。「昔からわれわれの先祖たちに誓われたように、真実をヤコブに示し、いつくしみをアブラハムに示される」（20）。ミカにとって最後の砦は主の「真実」でした。神に背いて罪に陥った民に対して、なおも変わらぬ愛と憐れみを注ごうとする主の真実が、絶望の淵でなお希望を与えたのです。主が真実な方でいてくださるとは、何と大きな慰めでしょうか。だからこそ、わたしたちはミカと共に次のように告白することができるのです。「しかし、わたしは主を仰ぎ見、わが救の神を待つ。わが神はわたしの願いを聞かれる」と。

人々の不真実に心がかき乱されるようなとき、わたしたちは決して変わることのない真実なる主を仰ぎ見、主が立ち上がってくださるのを待ち望もうではありませんか。